

監事 土性委員

(8) 報告事項

①令和6年度社会教育関係事業について

－事務局より説明－

議長：

市史編さんの進捗状況を教えてほしい。

教育長：

これまで、中央図書館の一係として市史編さん室としてあったものを、今年度から分離し、課に昇格させ、「市史編さん課」として新設した。事務所も、中央図書館から西紀支所に移転し、そこに資料の保管場所も設けた。各部会に分けて進めていることから、それぞれで進捗が違う。部会によっては、執筆に入っているところもある。

また、それぞれの地域において、住民の方に入っただき、地域ごとで資料編集等を進めているところである。

議長：

合併前の旧4町それぞれで町史があると思うが、合併後の市史を追加という形でまとめるのか。それとも、旧4町それぞれの町史は参考資料と見て、一から作成しているのか。

教育長：

旧4町の町史の内容も含め、また他の資料の発掘もしながら、まとめている。

議長：

色んな町が切磋琢磨しながら作り上げてきた歴史である。歴史の羅列だけではなく、そこに生きてきた人たちの物語が分かる市史だということ。作って誰も見ないようなものではなく、市民が関心を持って見てくれるような市史だと嬉しい。

副議長：

地域をどう分けているのか。着地点はどこなのか。それぞれたくさん歴史がある中でどのようにまとめるのだろうか。目的や着地点がぼやけているように思う。

地域差がすごく出るのではないかな。昔からしっかり資料を作っている地域もあれば、そうではない地域もあるのではないかな。

市としてどのように旗を振るのか。大体の道筋をつけて、後は地域にお願いするというやり方では、地域差が出てくるであろう。いったい何が作りたいのか疑問である。

事務局：

今後また、市史編さん便りの発行も計画されている。そういった中で、市民に情報提供しながら、作り上げていくことになると思う。

委員：

丹波篠山ABCマラソンについて。全国に色々なマラソン大会がある中で、ABCマラソンは参加者が少ないと聞いているが、今後どのように開催していくのか。

事務局：

第44回（令和6年3月）は約5,300人の応募があった。定員10,000人で募集していたが、約半数であった。様々な要因はあるが、コロナ禍でマラソン大会が中止になったことが影響し、走る機会が少なくなったことで、フルマラソンよりもハーフマラソンを走りたいという方が多くおられたのかと思う。また、2月から3月にかけて、東京や大阪、姫路等、都市型マラソンが増えていることも背景にある。

今年度（第45回）は、ハーフマラソンを走りたいという方が多くなっているという状況も踏まえ、今増えているリレーマラソンの実施や、PRについても力を入れている。「選ばれるマラソン大会」になるよう方策を検討している。

委員：

さぎそうホールについて。これはかなり古い建物であると思う。市民に使ってもらうことを考えるのであれば、改修等を勘案する必要があるのではないか。

事務局：

その辺りの認識はあるが、利用率等の問題もある。必要に応じて行うということになるかと思う。

委員：

社会教育関係で様々な事業が行われているが、コロナを経て参加者の数は元に戻ってきているのか。それとも、コロナ禍前に比べるとまだまだの状況なのか。

事務局：

丹波篠山総合スポーツセンターや西紀運動公園等のスポーツ施設の利用者、また、歴史4館の入館者数については、コロナ禍前の水準に戻ってきている。

公民館事業についても、ほぼ人数は戻ってきてはいる。ただ、強いて言えば、高齢者大学については、コロナ禍前まで参加者数が1,000人規模であったが、一旦500人まで下がった。令和6年度は715人まで戻ったが、コロナの影響だけではなく、社会の流れとして、高齢の方でも働き続ける方が増えたことも、参加者数が減った要因として考えられる。

また、公民館で管理する施設の利用者数は、増えている施設もあれば減っている施設もある。本日の会場の四季の森生涯学習センターは、令和4年度から5年度にかけては減少傾向が見られるが、絶対的な原因については見えてこない部分もある。しかし、活動を縮小された団体が増え、また、構成人数が減った団体が増えたように見受けられる。

他、市から補助金を交付している支援団体についても、コロナ禍前の状況に戻ってきた。コロナ禍の間は、様々な理由で事業を中止されていたが、令和5年度については、事業が実施できている状況である。

委員：

担当職員として、その状況は、苦勞することなく、自然に戻ってきている状況なのか。

事務局：

コロナ禍の前後で比較した場合に「戻る」という言葉を使用する場合もあるが、例えば体育祭や運動会を例にすると、事業の在り方について地域の方々が発展的な展望で議論された結果、コロナ禍前と同じように「運動会」という催しを開催するのではなく、持続可能な、また、地域の皆さんの負担を軽減する方法として「スポーツ体験イベント」という、スポーツを楽しむ1日として企画し開催された地区がある。

コロナで一旦停止した事業について、地域の皆さんによる議論を経て、再開の節目を、発展的に事業展開をされた例である

議長：

社会教育分野において、来年の丹波篠山国際博に絡めた取組はあるのか。

事務局：

公民館事業では、桶ッ卓球世界大会の開催を予定している。今年度の市政方針にも掲げており、来年度開催すべく企画を進めている。

議長：

古文書講座や歴史講座など、ふるさとを知る学習は皆さんされている。

その勉強された方々が、自分だけの知識に留めずに、活用してもらえそうな仕組みができないかという思いがある。

例えば、その地域において、インバウンドで色んな人が来たときに、説明をしてくれる人材がいればと思う。その時に、例として、公民館あたりが、対応を工夫できるような、人材をピックアップして紹介できるような工夫があっても良いと思う。

今、ディスカバーささやまにおいて活動されている人達だけではなく、「自分の村の話は、この人ならできる」「この校区の話は、この人ならできる」という人がいて、そこにインバウンドで外国の人が来た時に、例えば篠山国際理解センターから通訳を派遣してもらったうえで、外国の人に対して地域の話をしていただいたり、また、外国の人に日本の農村体験してもらえそうな、そういう仕掛けができないか。

桶ッ卓球は、遊びの輪の中に入ってもらおうというだけのものではないか。そうではなく、地域の人を活用した、国際博に絡めた仕掛け、そういったものが欲しい。それが、「企画」と言うのではないか。社会教育ならではの企画とは、そういったことではないか。

新しい、色んな人たちがどう絡み合って、社会教育的な世界を作っていくのかということ、担当課として、企画を考えてみてはどうか。

事務局：

国際博とは違うが、例えば事業の中で、古文書講座であれば、講座を受講された方で、今実際に、市史編さん事業に参加されている方が10名程度おられる。また、今後参加するという意向を示されている方も10名程度おられる。

このように、古文書講座で学んだ方が、市史編さん事業に参加されるという流れが作れている面もある。今、おっしゃっていただいたような企画も、公民館としてできることを検討していきたい。

議長：

令和4年度に、市内在住外国人の人達の社会教育参加はどうなっているのかという課題をテーマにして、その人たちが地域の活動に絡んでもらい、社会教育的な営みに参加してもらうような方策はないのか、話し合ってみようということで、篠山国際理解センターを訪問した。国際理解センターに色んな現状を聞いたりしたという経過がある。まだ、結論は出ていないが、国際博に絡めて、在住の外国の人たちが活動してもらえそうな場を提供できれば、これは素晴らしいことだという思いが私たちにはあった。

だから、丹波篠山国際博まで、あと半年と迫っている中で、在住の外国人を巻き込んだような社会教育を考えていければと思う。

障がい者の方を巻き込んだ社会教育の在り方など、研究課題は多々あるが、まずは、昨

年・一昨年にテーマにしていた、在住外国人の人たちを地域の中の一員として、社会教育活動に参加してもらうような方策はないのかと考える。

丹波篠山国際博が開催されるのであれば、在住外国人の方を、国際博のスタッフとして、表舞台に引っ張り出せるような仕掛けができないか。

委員：

今の議長のお話は、市事務局に対する提案であるが、逆に、事務局が、「もっとこういうことをやりたいが、どうしたらいいか分からない。」とか、ある事業について「今、こういった問題があるが、それについて、各委員はどのように考えるか。」等、そういった話を聞いてみたい。

一方的に委員側から「こういったことを実施してはどうか。」と提案しているが、市はその提案を受けるばかりではなく、市としても、やりたいことがあるのではないか。

事務局：

公民館事業で言うと、古くから人気のある事業は、今もやらせていただいているが、どういった新しいものを市民の方々が求めているかというのが把握し切れていない。

新しいことをしたいという思いはあるが、今、市の各部局において、様々な講座やセミナーをやっており、集客が非常に難しいという状況もある。

ただ、公民館としても新しい事業をやっていく必要性はあると思っているし、やりたい思いもある。

その中で、市民の方が求めているものは何か、そういった声があれば、お聞かせいただければうれしい。

委員：

公民館事業は、市民の方に沿った事業をされているから、その参加者の中から声を頂ければいいのではないか。

事務局：

参加いただいている方々からはアンケートを頂き、意見を吸い上げているが、やはり参加いただけていない方を、いかに公民館事業や市の事業に参加いただくかという点について、その部分は情報が掴みにくい。

参加されている方というのは、様々なことで活動されている方が多いのではないかと思います。そこまで参加いただけていない方に対し、どんなことをしたら取り込むことができるか、非常に悩ましい。結局、同じ顔ぶれが多くなってしまう。

委員：

やはり、平日開催だと、年代が決まってしまう。こういった意見はよく耳にする。

ただし、夜間は夜間で、仕事をされている方でも、外出したまらない方も多く、難しい。

議長：

「とっておきの音楽祭」について。

障がいのある方たちの中にも音楽の演奏ができる人がいる、ということから始まり、今年は80人近くの方が参加してくださった。コロナ禍が明けてから、参加者が増えており、来年は100人を超えるかというところまで来ている。一番多い時で、120人近くの方が参加され、コロナ禍で少し減ったが、また復活傾向にある。

とっておきの音楽祭においては、障がいのある方々の参加にあたり、例えば手話通訳者

グループを確保している。そして、手話通訳者グループのブースの中では、きちんとした自分たちの世界を作ってPRしてくれる。このように、様々な障がいのある人たち、またそういった人を支える団体が参加してくれている。

この、障がいのある人たちがどんどん社会参加していく世界が民間の手で作られているのに、行政職員はほとんど関わってない。福祉関係の職員は数名、事務局として入ってきてはいるが、ほぼいない状況である。

このイベントの運営組織の状況としては、中心メンバーが高齢化している。今後も続けていくイベントとして考えると、やはりバトンタッチしていきたい。では、その体制をどのように作ればいいのかと考えると、やはり、事務的な仕掛けが堪能な市職員が、もう少し積極的に関わってくれたらうれしい。

民の持っている社会教育力を活用していくような、社会教育・文化財課や公民館の事業を考えると、また新しい世界が見えてくるのではないかな。

例えば、各地域それぞれのまちづくり協議会は、行政的な支援は受けてはいるが、民の力が主となって運営されている。行政から一から十まで言われて運営しているわけではなく、民間の人たちが力を合わせて地域づくりをやっている。このまちづくり協議会とうまく連携していける形の事業が、社会教育・文化財課や公民館の事業としてあってもいいと思うし、研究してもいいのではないかな。

とりあえずは、来年の丹波篠山博に向けては、在住外国人の人たちの活用、それ以降については、障がいのある人たちとの連携、また、地域づくりにおいて、インバウンドで丹波篠山に来る人たちや若い学生たちを引き込むような取組が生まれてきたら、すごく良い。

例えば、瀬戸委員は、地域おこし協力隊で丹波篠山に来られた。若い人を取り込む手法については、よくご存じなのではないかな。瀬戸委員のような人を活用しながら、色んなことを考えていけたら、楽しい仕事になるのではないかな。

「決められたことをやらないといけない」とやるよりも、何か新しい、自身の思いを込めた事業を考えてもらい、楽しめるようなものを事業に反映させてくれたらうれしい。

事務局：

社会教育・文化財課、公民館に限らず、様々な悩みが現状としてはある。

前々からやっていた事業を、過去の話も聞きながら事業を進めている中で、なかなか形を変えることができないものがあったりする。

例えば、放課後子ども教室は、地域のボランティアのご尽力により事業が成り立っているが、子どもの数は年々減少、また、地域の方の数も減っているという中で、今後この事業をどのように展開していくか。

事業としては、良い取組なので、もっと実施校区を広げたいけれども、地域の方の人数は年々減少しているという現状の中で、どうしていけばいいのかというのを職員の中で話をして、策を見いだせていないところがあるというのが現状である。

当然、公民館の方も、様々な事業の悩みがある中で、その悩みを全て、この会議の場で相談させてもらうのは難しい。ただ、せっかく色んな分野の皆さんが一堂にお集まりいただいているので、例えば、この場を使って、それぞれ各部署から、本当に困っていることを一つピックアップし、提案し、相談させていただき、意見を聞かせていただくということに、この会議を使わせていただいてもいいのかなと思う。

そして、最終、市の施策に反映、また、施策の改善につなげていければと考える。

副議長：

新しい事業を始める前に、古い事業、現状に合っていない事業は、なくしていくべき。

事業を増やすだけというのは良くない。

長い間、資料を見ていると、変わっていない事業が多々ある。

毎日が忙しい等の理由から、また、何となくの流れから、事業を変えることができていないような気がする。

委員：

「スクラップアンドビルド」は、本当はあるべき姿である。

しかし、ある事業をなくすことで、例えば、何らかの苦情が市に入った時、それに対し、耐えることができるのか、その辺りを市としては準備しておく必要がある。

副議長：

なかなか変わることがない事業が年々増えていくことにより、負担が増える。仕事の面白みのなさに繋がってしまうと、疲弊してしまう。

色んな会議を見ていると、市は、様々な意見を言われ、宿題を持って帰るばかりという状況。どこでも、反対意見は絶対にある。意見を聞いてばかりでは、当然何も進まない。

まずは、ボトムアップするための、話し合いの場を設けるよう努めてもらいたい。

委員：

公民館条例施行規則の第5条に、「館長は、毎年4月中に当該年度の公民館の事業計画書を公民館運営審議会の審議を経て事業計教育委員会に提出しなければならない」とある。

この話は、自身が社会教育委員になった当初にも話をしたことで、その時は、色々な事情があり、遅くなっているとの説明を受けた。その後、もう少し早い時期に会議が開催されたこともあったが、また以前の流れに戻り、4月中に公民館運営審議会に諮らないで、8月手前になってから、会議が開催され、今年度の事業についての説明が行われているのが現状である。

議長：

今まで、もう10何年も、事業の名称も内容も変わっていない。

それは、市民の多くの利用者への影響を考慮したうえで変えることができないのか、それとも、変えるだけのパワーがないのか。

もし、そのパワーがないのであれば、私たち社会教育委員を活用してほしい。

ただ、今はもう、活用してもらう時期ではない。もっと我々の意見を活用するのであれば、適した時期に会議を開催して、次年度の事業についての相談をしてくれたら、我々も、職員と一緒に意見を出し合うことができる。

その意見を出せないまま、これまで来てしまっているのも、毎年同じような事業がずっと続けられているという結果にも繋がっている。

やはり、次年度事業の予算化をするまでに、少し来年度事業について、意見を募集されるような機会があれば良い。

委員：

そういった意見が社会教育委員から出たということについて。

附属機関の会議の公表ということで、後日、会議録が市ホームページに掲載されることになるかと思うが、なかなか、多くの人に目に触れにくいのが現状。

今、社会教育・文化財課において、インスタグラムを運用しているかと思う。そこで、社会教育委員から「スクラップアンドビルドは大事」「職員のやる気が湧き出る事業を展開していくことが必要」という意見が出たことを、しっかり発信していくべき。

議長：

もっと、我々社会教育委員をフル活用してもらいたい。

我々の思いもぶつけ合って、これからの新しい社会教育事業を考えていこうという方向を示してもらえたら非常に嬉しい。

教育長：

10月頃に、2回目の社会教育委員・公民館運営審議会の会議が予定されているが、次年度の事業について、ここで、意見を頂いたりできるのではないか。

事務局：

毎年、年2回の定例会議を開催している。例年、「丹波篠山の教育」を見ていただいたうえで、次年度事業についての意見等を求めている。ただ、それでは不十分だということで、2回目の会議で、よりそれを深掘りしたような形でご意見を頂くということで、例年お世話になっていた。

委員：

決議をとるということはないのか。例えば、10月に開催する定例会議に、議論の中身として、「この事業を終了しよう」ということを、この委員で決議したという記録を残すということとはできないのか。

どこまでの権限がある委員会なのかということ考えた時、法令等を見ると、あくまでも、社会教育委員の役割は、「助言する」という書き方になっている。

議長：

諮問に答えるという役割である。社会教育・文化財課や公民館から、ある事業について、「いかがでしょうか」という質問をされたとする。それに対して答え、結論を出すということができる。

その中で、例えば、「文化講座は、これからどういう風にしたらいいか。今後の在り方を考えてほしい。」という提案があった時に、「民間の中から、中心になっている人たちを何人かピックアップして、その人たちに運営を任して公民館事業から手を離してはどうか。」という話は、あり得る。

その際、具体的な形の諮問であればあるほど、答えやすい。

②関連行事日程

－事務局より説明－

事務局：

瀬戸委員が、9月6日（金）に京都市で開催される「近畿地区社会教育研究大会」において、兵庫県代表として「地域おこし協力隊の活動から考える地域づくり」のテーマで発表される。

瀬戸：

元々、私は、地域おこし協力隊として、地域で活動していた。

そこから、仕事を、仕事という面でもそうではない面でも、社会教育として考え、実践してきたつもりではあるが、地域と接点を持ち、チームを組み、地域活動を行ってきた自身のこれまでの活動を、一つのケースとして発表する。

(9) 協議事項

調査部会の活動について（今年度の取り組みについて）

－事務局より説明－

議長：

来年の丹波篠山博に向けて、何か具体的な一歩が踏み出せればというところがありますから、今年のテーマについては、居場所、つまり、在住外国人の人が参加できるような場所がどこかで設定できればと思っている。

一つは、丹波篠山国際博に絡んだスタッフとして入り込むか、それとも、また、既に多くの人が働いている所があるので、そこで働いている人たちを派遣してもらって、地域との交流をする、その地域の交流の場が、インバウンドの人たちとの出会いの場となったら、それもおもしろいのではと思う。

地域により、外国人の方がたくさんおられる地域もあれば、そうではない地域もある。

委員：

私の地域では、行事としては、祭りに参加していただいたりとかはある。

会社の寮があり、2年から3年の短期で来られている方が多い。

議長：

その地域の在住外国人の方に、インバウンドの対応のモデルとしてお願いすることは、やはり難しいか。

委員：

そういったことは、生活にゆとりがあってこそできる。様子を見てみると、生活に必死であり、買い物に行くにしても、車もない。それだけに、時間もなく、ゆとりがある様子ではなさそうである。

祭りに参加された方は、とても楽しそうであったが、その人自身が主体的に、スタッフになってやるというのは、難しいと思われる。

議長：

その辺りを、調査研究部会の中で、話し合っていければ。

委員：

話は変わるが、以前、事務局から個人的に相談があった、毎年開催されている丹波篠山市展について。

次回、第20回を迎えることとなるが、来場者数や出品数がだんだん減っているようだ。

どういった方に来場してもらうか、また企画の面や課題について、一度、調査部会で、研究テーマとして取り上げてもいいのではと個人的に考えるが、どうか。

議長：

それは、丹波篠山市展に、在住外国人の方をスタッフとして絡めていくような計画か。

委員

それも、もしかしたら可能性としてはあるかもしれない。

来場者数の点からすると、市民の人にもっと来てほしいというのが第一かもしれないが、市外の人も含めた来場者、あるいは外国人の方にとっても、もしかしたら楽しいイベントにもできるのかもしれないし、何かいろんな発想があり得ると思った。

委員：

それに加え、公民館が運営している桶ツト卓球も、国際大会実施に向けて動いている。

桶ツト卓球においても、在住外国人の方に、どのように活躍していただくか、考えてはどうか。

事務局：

第1回目を開催した際、参加いただきやすいように、外国人の部を作るという形で、国際理解センターにも声をかけ、多くの方に参加いただいた。何か仕掛けづくり、皆さんからもお話を頂いて考えていければと思う。

議長：

今年度の調査部会については、引き続き、外国人の方の社会参加、社会教育参加ということで、考えていきたい。

(10) その他

—事務局より連絡—

(11) 閉会 加古副議長